

Constructive Living を活用したフリースクールの取り組みと災害復興支援活動の効果

杉井保之、井上弥生、鈴木厚志、天野績男

- 1) 一般社団法人日本CL (建設的な生き方) 学会
- 2) フリースクール・オンリーワン
- 3) 京丸園 株式会社
- 4) 有限会社 安心サービス

はじめに

文部科学省の調査によると、平成 21 年に「不登校」を理由として 30 日以上欠席した児童生徒数は、小学生 22,327 人、中学生 100,105 人の合計 122,432 人で、平成 13 年度をピークとして、全児童生徒数の 1.15%~1.20%の間を推移している。これは小学生 316 人に 1 人、中学生 36 人に 1 人が不登校であることを示しており、依然として深刻な状況が継続されている。(表 1 . 参照)

表 1. 小・中学校における不登校児童生徒の状況

	小学校			中学校		
	全児童数(人)	不登校児童数(人)	%	全児童数(人)	不登校児童数(人)	%
平成 3 年	9,157,429	12,645	0.14	5,188,314	54,172	1.04
平成 4 年	8,947,226	13,710	0.15	5,036,840	58,421	1.16
平成 5 年	8,768,881	14,769	0.17	4,850,137	60,039	1.24
平成 6 年	8,582,871	15,786	0.18	4,681,166	61,663	1.32
平成 7 年	8,370,246	16,569	0.20	4,570,390	65,022	1.42
平成 8 年	8,105,629	19,498	0.24	4,527,400	74,853	1.65
平成 9 年	7,855,387	20,765	0.26	4,481,480	84,701	1.89
平成 10 年	7,663,533	26,017	0.34	4,380,604	101,675	2.32
平成 11 年	7,500,317	26,047	0.35	4,243,762	104,180	2.45
平成 12 年	7,366,079	26,373	0.36	4,103,717	107,913	2.63
平成 13 年	7,296,920	26,511	0.36	3,991,911	112,211	2.81
平成 14 年	7,239,327	25,869	0.36	3,862,849	105,383	2.73
平成 15 年	7,226,910	24,077	0.33	3,748,319	102,149	2.73
平成 16 年	7,200,933	23,318	0.32	3,663,513	100,040	2.73
平成 17 年	7,197,458	22,709	0.32	3,626,415	99,578	2.75
平成 18 年	7,187,417	23,825	0.33	3,609,306	103,069	2.86
平成 19 年	7,132,874	23,927	0.34	3,624,113	105,328	2.91
平成 20 年	7,121,781	22,652	0.32	3,603,220	104,153	2.89
平成 21 年	7,063,606	22,327	0.32	3,612,747	100,105	2.77

文部科学省では、不登校問題は「心の問題」だけではなく、「進路の問題」でもあるという観点から、不登校の問題の解決目標を「子供たちの将来的な社会的自立」において、スクールカウンセラーの配置や不登校児童生徒を対象とした教育課程の弾力化措置などさまざまな対策をとっているが、有効な成果が上がっていないのが現状である。

問題提起

学校に行かない子供たちの研究は、1932 年のトレイノールが「学校の病気 (school sickness)」で最初に発表し、翌年(1933 年)I.T.ブロードウインが、学校を休む子供の中に神経症的な傾向を示す一群があることを報告して始まった。

日本の「不登校」という用語も、1980 年頃、大阪大学の和田慶浩氏らが「諸種疾患の療養のための就学不能、親の無理解や貧困による就学不能、非行な

どが原因となっている怠学などを除外したもので、その背景に何らかの精神病理的問題を抱えている場合」を不登校 (non attendance at school) と名づけたように、不登校と神経質との関係は古くから言われている。

そこで神経質傾向の強い不登校の子どもたちの社会的自立を目指して、森田療法と内観法をベースにした Constructive Living (以下 CL) を授業に導入したフリースクール・オンリーワンの取り組みを調査し、CL が不登校の子供たちの心理にどのような効果があるのかを検証することで、不登校問題解決の一助となることを目指したいと思う。

研究方法

フリースクール・オンリーワンの生徒たちは、5 月 1 日、東日本大震災で津波の被害にあった宮城県仙台市若林地区に、8 月 5 日に陸前高田市の仮設住宅に赴き、

- (1) 瓦礫の撤去
- (2) 被害状況の視察と被災者との交流
- (3) 花壇の製作
- (4) マジックショーの開催

を体験した。

その際、現地に行く前と後に、自己肯定意識尺度：平石(1990b)と、自尊感情尺度：ローゼンバーグ(1965)を山本・松井・山成が邦訳したアンケート用紙を用いて調査を行った。

結果

ボランティア活動の前と後との調査結果について t 検定を行ったところ、ボランティアに行く前よりもボランティアに行った後のほうが、生徒たちの自己受容、自己実現態度、充実感、自己表明・対人的積極性と自尊感情が高くなり、自己肯定意識尺度の下位尺度である自己閉鎖性・人間不信、被評価意

識・対人緊張が低くなっていて、それぞれに有意な差が見られた。

・考察

こうした態度の変容は、支援活動を通して生徒たちにCL的な働きかけをしていることによると思われる。その働きかけの具体例は、次のとおりである。

第一回、訪問におけるCL的な働きかけ

5月11日、初めて仙台市若林地区の瓦礫の撤去に赴いた際は、作業現場に着いても初めての作業への不安と緊張で生徒たちは終始無言であった。しかし、そうした不安を無理に取り除こうとするのではなく、「ここからこの範囲を、分間で片付けましょう」「あと分間で時間です」「まだ、土に埋もれている宝物(瓦礫)があるようだから、よく探してください」と指示を具体的にすることによって、作業に目的を持たせたり、作業に集中させるようにしていた。

作業範囲を小さく限定したのは、たくさんの仕事量を見ると、どこから手をつけたらよいかかわらなくなる神経質の特徴を配慮した働きかけで、CL森田の「大きな仕事は、小さく分ける」の活用である。

また、「まだ、土に埋もれている宝物(瓦礫)があるようだから、よく探しましょう」という働きかけは、内省しがちな生徒の意識を外に向けたための働きかけである。こうした働きかけによって、作業に集中しやすくなり、同時に不安から気をそらす効果があったと思われる。

休憩時間や作業終了時には「自分たちが片付けたところを見てください。ずいぶんきれいになりましたね」と自分たちの成果を確認させている。普段、家に引きこもりがちな生徒たちにとって、被災地での瓦礫の撤去は、まさに「恐怖突入」であり、自分たちが作業した「事実の観察」は、言葉での励ましよりも彼らの自己肯定意識や自尊感情に大きな影響を与えたと思われる。

第二回、訪問におけるCL的な働きかけ

8月5日の訪問は、二度目であったため第一回の訪問と比べて出発前の緊張は少ない様子だった。

そこで支援の内容を第一回のように体を動かす作業だけでなく、被災者との交流を交えた内容を用

意した。また、第一回の訪問のときのように、「ここからここまでを分で」と指示をすることで作業に集中させるのではなく、花壇のデザインまで生徒たちに任せることによって、作業に集中するように工夫していた。

花壇のデザインを生徒たちに任せることは、CL森田の「目的を持つ」の活用である。

仮設住宅に入れていただいて被災者の実生活を見せてもらい、被災時の大変な状況を聞いてからの作業は、していただいた事実を認めてしてさしあげる行為であり、CL内観の活用となっている。

生徒たちは被災状況の視察と被災者の体験を聞くことによって、これまで自分たちが当たり前になっていた生活が、どれほど恵まれていたものであったかに気づいた様子であった。

こうした神経質に焦点を当てたCL的な取り組みが、神経質の状態を緩和し、生徒たちの態度変容をもたらしたと考えられる。

・まとめ

文部科学省も明記しているとおり、不登校の問題は、「心理の問題」と同時に「進路の問題」を内在している。そのため、たとえ学力が身についたとしても、神経質な自分との付き合い方が身につけられない限り、さまざまな人との間で、社会的自立を果たしていくことは難しいと思われる。

そうした状況において、カウンセラーなどの手を借りなくても、自分自身の行動によって、ある程度の態度変容ができたというCLの実体験は、子供たちにとって大きな意味を持つと思われる。

本研究では、CL的な働きかけをする前と後の心理状態の比較をしたが、不登校の生徒に対して、神経質に焦点を当てた取り組みをしている活動は少ないので、今後も継続してCLを活用した取り組みを調査して、不登校問題の一助としたい。

【参考文献】

David K. Reynolds : A Handbook of Constructive Living